大地

S55. 1. 10
No. 3
浄国寺

初冬

水口好二郎

紐にそう道をゆきつつ水の音
強しと思ふ初冬に入りて

梱包の孤を開けば杉苗の
青き束より杉の香は立つ

晩秋の風絶え間なく吹く山に
杉を植ゑつつわが心澄む

ひと夏に伸びし雑木を刈り払い
二年子の杉に日をば当てやる

遅くなる帰りを云ひて藁切りに
父は行きたり押鎌もちて

（註）水口氏は、歌誌「北潮」同人
新井市 佐川在住

「生も死もともにわがもの」

山崎武雄

皆様、明けましてお目出度うございます。旧年夏には多年の懸案であった、本堂の改修、庫裡の改築も皆さんの心からなる御協讃により、立派に完成させて頂き、誠に有難く厚く御礼申上げます。今後こゝを単なる寺の家族の生活の場、檀信徒の集会憩いの場としてでなく、あくまでも同行の念仏の道場求道精進するところとして活かして参りたいと存じます。

毎年報恩講の法話に講師として来て頂く堀前恵成師は（俳誌ホトトギス同人）お祝として

o 生も死もともにわがもの盆の月

と御自作の句を、色紙に流麗暢達の筆で書かれ、立派な額に入れてお贈り下さいました。明治の親鸞とよばれた清澤満之師も「生のみがわれ等に非ず、死もまたわれ等なり」と教えられました。生も死もともにわがもの、人は生老病死のただ中に居ります。なぜか死の凝視をさけ、世の無常を感得せぬ人には、生の意味、生きる喜びがわからぬのではないでしょうか。

今年文化勲章を受与された堀口大学先生（戦時中高田に疎開されていた）の歌に

o 深海の光に遠くすむ魚は
　ついに眼を失うとあり

とありますが光から遠くはなれてすむ深海の魚は、ついに眼あれど見る力を失って居るとの事であります。煩悩障眼（ぼんのうしょうげん）煩悩に眼さへられて仏を見たてまつらず、私共はいつか自己に目覚める眼、人生を正しく見る眼を失っていないでしようか。先年九十一才で亡くなった母は晩年「愚痴こぼす時と処に恵まれた」とよく語って喜んでくれました。罪深く悩み多き身も「本願を信じ念仏申さば仏となる」この身今生に時と処が与えられているのです。生も死もともにわがもの、限りある人生乍らそれは必要にして、且つ充分なのです。

私共は無碍光の中にあることを実感し、生きる意味、生きる喜びを知らせて頂くことが人生の最高最大の幸福であることに、今こそ目覚めましょう。

△◎△◎△◎△◎△◎△◎△◎
□□□□□□□□□□

亡き妹を偲び

加藤千里

此の度はお多忙のところ、亡きトキの供養の為、お出席下され誠に有難く厚く御礼申上げます。この法要は皆様の総意の許に行はれるものでありまして、さゝやか乍ら心のこもった意義のあるものであります。（中略）

あのいたましい終戦と共に、たとへようもない無常の風が吹きあれ、我々のはらからは、自らの運命の導くままにさまよって参りました。トキもその中の一人でした。

行方不明と云うことで県庁より四月三十日の死亡宣告を申渡され不本意乍ら本年の初めまで過して参りました。はるかなる満洲の荒野にどんな気持で永眠したであらうか、又生きて居るやらも知れないのに自分勝手の考えから、仏の道にはずれその真実を知るべく努力せずに参りました。その我々の心の中に眠っている、気付かないでいる、そのものを、阿弥陀仏の働きにより目覚めさして頂き、皆の力を一つにして真実を求めさが

し歩いて参りました。併し仲々真実は判らずあきらめてしまいそうな時もありました。我々がどうしても判らず困っていた時、はからずも中国にいられる猪俣ツヨ様の事をきゝすぐお願い致しました。猪俣様は我々の心持を御理解下さいまして、親身になって、トキの死を確めるべく並々ならぬ御苦労をして下さいました。併し過日皆様に差上げました通り、我々には何とも悲しい御報告がもたらされました。皆様方も想いは同じと考えますが、肉身として誰一人臨終にみとってやれなかった事に想いはせる時、死亡と云う事に50％あるいは80％は諦めざるを得ないけれど100％は信じ難いとお想いになるのも肉身の情としてそうあるのが本当だと思います。お同席下さいました前山千代様を含めまして加藤トキなる者は、永久に生き続けて居ります。併し乍ら現実として亡き人の数に入った事を認めてやらなければならないのでないでしようか。そうする事が仏の願いではないかと思います。

肉身がみとってやれなくとも、国こそ変れ、同じ人間であり、夫と定め、身を託して十有余年を過した人にみとられ、此の世を去ったトキにはそれで満足して死ねたと思ってやりたいのです。併し故郷を想い、父母を想い、兄弟姉妹を想うそのやるせない心が今日の我々の心に響き、我々の原動力となり、我々も又一丸となって歩く事が出来たものと信じます。

亡き人の冥福を祈る心は、そのまま祈られている身であり、願われる感応こそ、久遠の命なのです。亡き人と私達が久遠に結ばれて明日への確かな一歩が私達に生れるのです。皆様と共にお経を聴かせて頂き、念仏申す此の時こそ、仏の願に私達が大きく近づいたことに共に喜びに思うところであります。どうか自分の生命のある限り、すべての亡き人々の想いを大事にしてその冥福を祈り自らもまた至らぬところに気付かせて頂き、阿弥陀仏と共に生きて行かうではありませんか。お互いにたどる道は異り、その為に考え方も異なる事は致し方ない事ですが、亡き仏に対しての今の心持をいつまでも自らのたからものとして大事にして下さい。お願い致します。

（十一月十八日）

（註）加藤トキさんは、戦時中満蒙開拓団員に、十有余才の若き女の身で志願して行かれた。併し終戦直前ソ連の満洲への侵攻により、この地を追はれ、飢餓、略奪、厳寒、言語に絶する苦労のはて、かの地で行方不明となり、やがて死亡宣告された。
東五人、女五人の兄弟姉妹は長兄千里さんを中心に一丸となってその最期の確認に、百方手をつくされが知られず、はからずも昨年在中国の猪俣さんによりその死を教えられた。これは涙の中に懇ろに法要をつとめられた時の挨拶であります。

なきがらをうめまつらんと
穴をほる。凍土とけたり
待ちて久しき。

しかばねの　ひとつひとつを
たしかめて　長かりし冬を
思いみるかな。

餓死したる吾子にそなうる
白米の　ひとにぎりだに
おちてあらぬかも。

（註）柏崎日報社刊・開拓団流氓「二龍山（あるろんしゃん）」深田信四郎著より

一箱のキャラメル

河上　肇

大連にゐる涙子と浩子
眼に入れても痛くない
八つと六つになる孫の子が
おぢいさんに上げると云って
キャラメルを二箱
送って寄越した
ひとりゐの私はそれを手にとって
嬉しくて涙を落した
だが余りに勿体なくて
すぐに口にする気になれなかった
私はその一箱を
近所にゐる孫たちにくれてやり
残りの一箱は
茶棚の抽出しにしまい込んで
長いこと置いておいた。
私はたびたび誘惑に襲はれながら
まあまあと思って
今日まで封を切らずにおいた
そしてそれを小包にし
郷里にゐる母の名を
その表紙に書き了へた今
やっと私は
悪いことをしないで済んだやうな
安らかさと嬉しさに浸ってゐる

（昭和十九年六月二十日作）

（註）これは河上肇博士が戦争末期、奥さんが、大連へ娘さんの看病に行かれ、京都で独り自炊生活をして居られた時、作られたものです。

一箱のキャラメルを読んで

山崎　睦

核家族、親子の断絶と言う様な言葉を、幾度か耳にして参りました。今此の詩を読んで、本当に心あたたまる思ひが致しました。
愛情が満ちあふれています。私の家にも孫が三人居ります。一番下の孫が、時々幼稚園から、松ぼっくりや、紅葉の葉を拾って来てそっと私の掌に乗せてくれます。なんとも可愛いく、幸福感が体中に拡り、食器棚の上に並べておきます。口を開けば家族とも話が出来ますし、手を延せば孫の頭を撫でる事も出来ます。家族に囲まれた身の倖せを思うと共にこれからの短い人生を、生きる喜び一ぱいに過させて頂く様心掛けて居ります。

冬の朝

山崎　隆昌

今朝は随分冷え込みが厳しい。薄明るくなった外の様子を観るため、生温かな布団を抜け出し窓に近づくと、ガラスに付いた水蒸気がすっかり凍り曇っていた。

「ハーア」と息を吹きかけ、溶けた円い穴から外を見ると、青白く冬囲いされた木々や、家の板塀がうっすら雪をかむり、あまりの寒さにギシギシ震えている。かすかな朝の光が軒先の氷柱に宿り、弱々しく光っていた。

今日また生きるための営みが始まる……。

『悲劇とは自から羞ずる所業をあえてしなければならぬことである』と言ったのは龍之介であるが、生きる営みとはこのようなことなのであろう。土台、自から羞ずることのない所業などあるのだろうか。

自から羞ずる所業とは、他の人の眼は全く関係しない。自からの生きる営みそのものであるから。あえて言うならば、絶対なるものの眼に対して羞ずるのだろう。

自から生きることの羞しさを知ることは悲劇的であるが、それを知らないでおることはもっと悲劇的である。

私達の生きる証は、冬の木々が淡い朝の光をうけて、少しづつその存在を闇から明らかにされるように、かすかな歩の中に在る。

冬の朝は寒くそして美しい。

「雛によせて」

山崎　慎子

まだ年も明けぬうちから、街にはぽつぽつお雛様が見かけられたのだが、新年と共に、今度は広告が入ってくるようになった。

私が幼かった頃、家にはお雛様は無かった。その変らしさ故に、心ときめかせて眺め入ったりはしたものの、まずは高嶺の花と最初からあきらめてかかっていた。その頃は今とちがって、どこの家にもお雛様があるという時代ではなかったのだ。

長女が生れて初節句を迎えた時頂いたお祝で、私は内裏雛を買うことを思い立った。当時、奈良に住んでいた私は、京都四条の人形の老舗へと足を運んだ。どんなに小さくても、「良い物」が欲しいと思ったのだ。私は自分の世間知らずを知らねばならなかった。桁が一つも二つも違っていたのである。結局、その年のお節句は、色紙に貼絵のお雛様をほどこした実にささやかなものに思いだけはいっぱいに込めて祝ったのである。

翌年三月も終りに近い日に、長男を出産した私に、里の母は大きな風呂敷包みを背負ってかけつけてくれた。それは旧暦で祝う習慣の残っている里の母が、急に姉扱いにされてとまどうであろう長女に作ってくれた、可愛らしい木目込みのお雛様だったのである。

以来、毎年三月になると我家の居間の一角には、ふっくらした木目込みの内裏雛が一対飾られるようになった。ほんとうに小さくて、さゝやかなお雛様ではあるが、部屋の中がほのぼのと華やぐようで心楽しいものである。

その長女もこの三月には十才になろうとしているが、今年は父が、得意の筆をふるって、立ち雛を茶掛けにするように描いてくれるはずである。

祖父母達が、それぞれのお雛様にこめた思いを長女が十分に感じとってくれるのはいつのことだろうか。